

生シイタケの原木栽培における原木の剥皮面積の違いが子実体収量へ及ぼす影響

1 はじめに

県内の原木シイタケ栽培現場では、原木の確保が課題であり、今後はパルプ・チップ用材といった、樹皮の損傷が含まれる丸太の利用を検討する必要がある。そこで、原木の剥皮の程度が、生シイタケ栽培の子実体収量へ及ぼす影響を調査した。

2 材料と方法

岩手県葛巻町産のコナラ、ミズナラ原木(長さ90cm、直径7~14cm)を供試した。原木は、総樹皮面積に占める剥皮面積の割合(剥皮率)が、0~25%になるように調製した(写真)。その後、剥皮原木へ、2021年4月21日にオガ菌(秋山A-511号、(株)秋山種菌研究所製)を植菌し、ホダ木を約6か月間ハウス内で伏せ込み、同年11月3日から浸水等の発生処理を実施し、ハウス内でホダ起こしした。11月10~12日にカサが開き始めた子実体を、ホダ木ごとに収穫し、各ホダ木の子実体個数と総重量を計測した。調査結果とホダ木の材積を元に、直径10cmのホダ木あたりの子実体個数と総重量を算出した。

3 結果

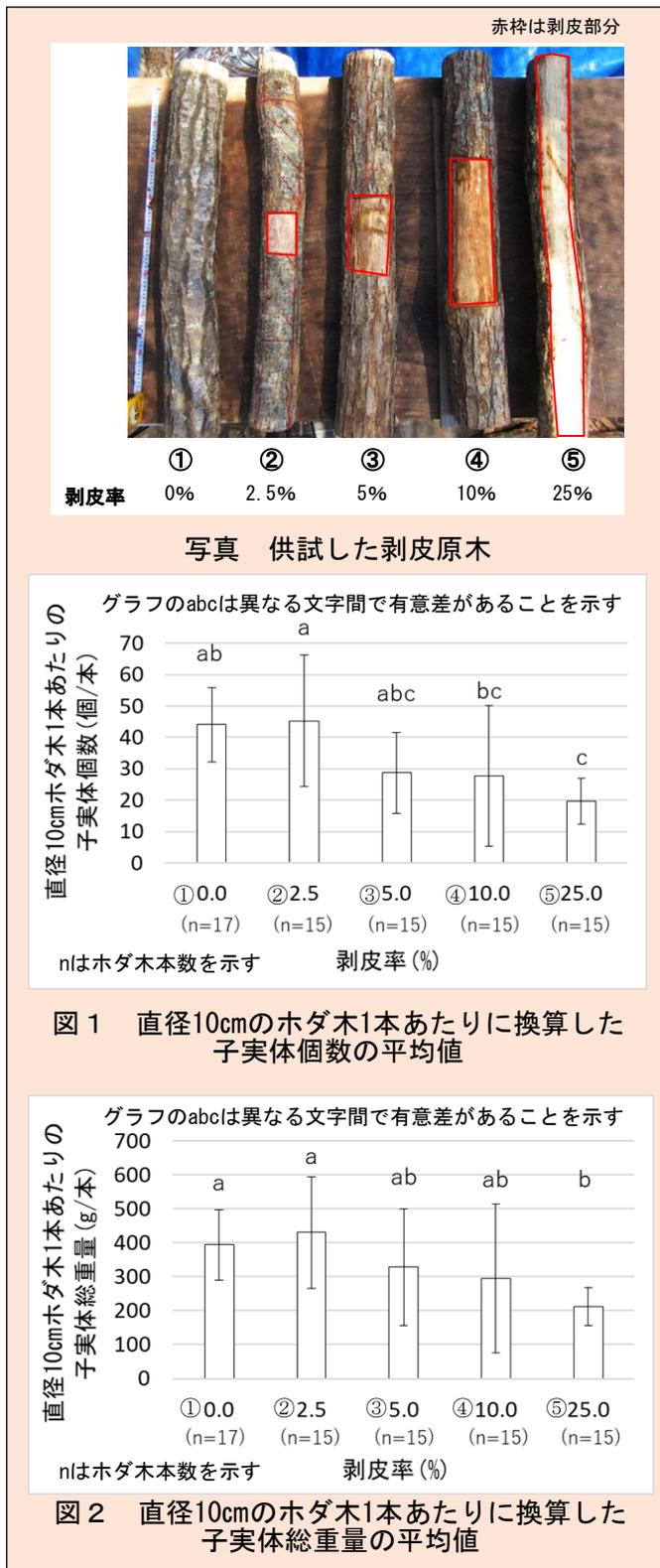
原木の剥皮率が増加すると、子実体の個数及び総重量は減少する傾向を示した(図1、2)。一方で、剥皮の割合が低い条件(剥皮率2.5%)では、収量への影響は小さいことが明らかになった。

4 さいごに

パルプ・チップ用材といった、樹皮の損傷が含まれる丸太でも、損傷程度が低い場合には、原木シイタケ栽培へ利用できるものと考えられる。今回は、初回の収量に対する結果だったが、今後も当該丸太での調査を継続し、樹皮損傷丸太の原木利用の可能性について、引き続き検討を行う予定である。

本報告の一部は日本きのこ学会第24回大会(2022年2月28日~3月2日)において発表した。

謝辞: 本研究にご協力いただいた、(有)立花椎茸農園と(株)秋山種菌研究所に感謝申し上げます。



(担当 研究部 専門研究員 皆川 拓)

連絡先

028-3623 岩手県紫波郡矢巾町大字煙山第三地割560番地11
岩手県林業技術センター
ホームページアドレス

TEL 019-697-1536
FAX 019-697-1410
<http://www.pref.iwate.jp/~hp1017/>